

「奥の細道」は芭蕉が崇拜する西行の 500 回忌に当たる 1689 年（元禄 2 年）に、門人の河合曾良を伴って江戸を發ち、奥州、北陸道を巡った旅行記である。全行程約 600 里（2,400km）、日数約 150 間（一日平均 16km）で東北・北陸を巡って、元禄 4 年（1691 年）江戸に帰っている。

参考・引用資料：Wikipedia 「新版 おくのはそ道」 穎原退蔵、尾形尙訳注 角川ソフィア文庫 画像は無料画像より

江戸、発端

月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。舟の上に生涯を浮かべ、馬の口をとらえて老いを迎ふる者は、日々旅にして、旅を栖（すみか）とす。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風に誘われて、漂白の思ひやまず、海浜にさすらへて、去年の秋、江上の破屋（芭蕉庵）の蜘蛛の古巢を払いて、・・・

以下略
「草の戸も 住み替はるぞ 雛の家」

注釈：住み慣れて来たこの草庵、折からの弥生の節句に自分の出たあとの草庵は娘・孫を持った新しい主により、華やかに雛を飾る家と変わるが、それに対して今や自分は、棲み処はなく無所在の旅人に出ようとしているのである。

旅立ち 3月27日 （私の出発日： 年 月 日）

弥生の末に七日、あけぼの空ろろうとして・・・元禄 2 年（1689）3 月 27 日、明け方、芭蕉庵より舟に乗って出立つし、千住（日光街道の宿駅）所にて舟を下り、見送りに来た人々と別れを惜しんで門人の河合曾良を伴い出発した。

「行く春や 鳥啼く魚の 目は泪（なみだ）」

注釈：三月の春光すでに過ぎ、今や春もまさに逝かんとしている。あてももなくさすらう鳥の鳴き声も哀愁に満ち、水に浮かぶ魚の閉じることのない目も涙にうるんでいる。



草加 その日やうやう草加というふ宿にたどり着きにけり。草加は日光街道、千住の次の宿駅。同行した曾良の日記によると、粕壁に泊まる。江戸より 9 里余

室の八島 3月29日 江戸より 92km （私の到着日 年 月 日）

室の八島（現在の栃木市惣社町）にある大神神社を参拝する。芭蕉が何も歌を残していないのは、実際の景観が歌枕（古歌に詠まれた名所）に寄せる期待を裏切るものであったからとされる。室の八島を一見して鹿沼にとまる。



日光 3月30日 江戸より 144km （室の八島より 52km）

（私の到着日： 年 月 日）

30 日（晦日）日光山の麓（上鉢石町）に泊まる。卯月朔日、御山（日光山）に詣拝す。この御山を「二荒山」（ふたらさん）と書きしを、空海大師開基の時、「日光」と改め給う。

「あらたふと 青葉若葉の 日の光」

注釈：あら尊いということよ、青葉若葉の濃淡とりどりに織りなす初夏の緑にさんさんと映発する日の光、それはこの霊域の神霊の荘厳そのものだ。



二十余丁町ほど山路を分け登って行くと滝に出る。滝は岩洞の頂上から飛流すること百尺、千岩の重畳するまっさおな深淵に落ち込んでいる。岩窟に身をかがめて入りこみ、滝の裏側から見るので裏見の滝と申し伝える。

「しばらくは 滝にこもるや 夏(げ)の初め」

注釈：おりから僧徒の夏行くも始まろうとするところだ。こうして滝の裏側に身をひそめ入り、しばしの滝ごもりを気取って、いちだんと精進の気持ちをかためる次第だ。



那須野 4月3日

那須の黒羽といふ所に知人がいるので、これより本街道へは迂回せずに、那須野越えにかかって、近道を行くことにしたが、雨が降り出し日が暮れてしまった。農夫の家に一夜の宿を借り、夜が明けるとまた一面の野原の中を歩き続ける。原の中に放し飼いの馬がいる。付近で草を刈っていた百姓男に馬を貸してくれと頼み込むとむくつけき田舎者とはいえ。人情を解さないわけではなかった。仕事の途中だから、案内するわけにはいかぬし、田舎道で道を間違えるのも心配だからと言って、この馬が止まった所で馬を返してよこしなさい。と子供が二人、馬の跡をついて走ってくる。



那須 八重撫子

「かさねとは 八重なでしこの 名なるべし」 曾良

注釈：一人は可愛らしい小娘で、聞くと名を「かさね」という。あまり聞き慣れない名が、いかにも優雅に思われた。この場面は参考にした「おくのほそ道」の表紙になっているが、小娘の表情は鮮明ではない。御覧のごとく芭蕉は全行程歩いているわけではなく馬にも乗っている。

黒羽 4月3日～16日 江戸より211km (日光より67km)

私の記録： 年 月 日

黒羽藩の城代家老浄法寺図書(俳号桃雪)のもとを訪ねる。4月3日～16日滞在した。折から五月雨の候にかかって天候不良のせいもあったが、めざす陸奥への関門白河の関を前に控え前途の用意を整え、氣息を養う意味が大きかった。修験光明寺という寺があり、そこに招かれて、行者堂を拝んだ。



夏山に 下駄を拝む 首途(かどで)かな

注釈：遠く幾重にも連なる、滴るような緑をたたえた初夏の山なみを望んで、あの向こうが目指す陸奥なのだと心弾ませつつ、行者堂に安置されている役行者の足下駄を拝み、その健脚にあやかって、前途の千山万里を無事踏破できるようにとの首途(門出)の祈願をこめることである。

雲巖寺 黒羽の雲巖寺に禅の師匠であった住職、仏頂和尚の山籠もりされた跡を訪ねる。縦横の五尺にたらぬ草の庵であった。

「木啄(きつつき)も 庵は破らず 夏木立」

注釈：あの、寺をつつきこぼつといわれている木啄きも、この草庵だけは破らなかったのだ。それは今、自分の目の前の鬱蒼たる夏木立の中に別天地を存していることよ。



那須温泉神社 殺生石・遊行柳 4月19日 那須湯本 288km

黒羽より77km 私の記録： 年 月 日

那須町の温泉神社に那須与一を偲び、殺生石を訪ねる。館代より馬にて送らる。殺生石は温泉の出づる山陰にあり。

「野を横に 馬引く向けよ ほととぎす」

注釈：広漠たる那須の原野を分けて行く馬首を大きく横に引きめぐらせよ。



野を横切ってほととぎすが鋭く鳴き過ぎた。その声の消えゆく方へ。風雅な馬子よ。

遊行柳 西行法師が「清水流るる柳陰」とよんだ、柳は菰野の里にあって、
今も田のあぜの間に残っている。

「田一枚 植えて立ち去る 柳かな」

注釈：詩人の詩魂をとどめた柳の精の前に、捧げる物を持たず先を急がねば
ならぬ旅の身の、せめては奉仕の手わざをと、みずから田に下り立ち、田一枚
植えて心を残しつつその前を立ち去って行く。



白河の関 4月20日 江戸より332km 那須湯本より44km
私の到着日： 年 月 日



なんとなく不安な心せかされる日数がつもってゆくうちに、今、白河の関に
さしかかって、やっと旅の中ひたりきる落ち着いた気分になった。・・・この白河の関というものは東国三関の
一つに数えられて、多くの歌人雅客が吟懐を読み残したところだ。・・・能因法師の名歌に敬意を表して冠を正
し衣装を改めて通った。

小中高時代の同級生と 右側筆者

卯の花を かざしに関の 晴れ着かな 曾良

注釈：古人はこの関を越えるのに、時に衣冠を改めて通ったと伝えられているが、改めるべき衣冠も持たない雲
水行脚の自分たちは、折から辺りに咲き乱れている卯の花をかざしに、それをもって、この地に多くの名歌をよ
み残した古人に敬意を表すべき関の晴れ着として越えてゆこう。

(注：芭蕉は日光までは特に寄り道をせず街道を歩いたようで距離は日光街道の宿場間距離と一致するが、日光
以降は街道を大きく逸れたこと、時には道に迷ったこともあり、記録帖「奥州街道竜飛岬まで」記載の距離とは
一致しない。奥の細道を忠実に歩いた人(HP ENJOY WALKING)の記録によっています。歩幅60cmで毎日1
万歩のウォーキングでも、ゴールには1年近くかかる長距離(2,106km)です。(この項完) つづく。